



神聖ローマ帝国におけるアーサー王伝説の展開をめぐる歴史学的研究：アンデクス・メラン大公家における『パルツィヴァール』と『ヴィーガロイス』から

川西, 孝男

(Citation)

第67回日本西洋史学会大会報告集:32-32

(Issue Date)

2017-05-20

(Resource Type)

conference object

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004029>



神聖ローマ帝国におけるアーサー王伝説の展開をめぐる歴史学的研究

—アンデクス・メラン大公家における『パルツィヴァール』と『ヴィーガロイス』から—

川西 孝男

英国のアーサー王伝説は、12世紀頃までにフランス諸侯の宮廷でキリスト教本来の色彩を強く帯びた「聖杯騎士伝説」として、さらには神聖ローマ帝国の中枢においてキリスト千年紀の新たな理念の象徴として変容を遂げた。本論では、この新理念が、当時の神聖ローマ帝国のヨーロッパ大陸の実質的支配者であり、「ニーベルンゲンの歌Das Nibelungenlied」などゲルマン神話とも密接な繋がりを持つアンデクス・メラン大公家Herzog Andechs-Meranienから発信されていたことを歴史学的アプローチによって例証する。さらに、この大公家がアーサー王伝説に根ざした新たな神聖ローマ帝国の統治システムを目指していたことを、この大公領出身者で、当時最高の文化人そして騎士であった2人のミンネゼンガー、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハWolfram von Eschenbachによる『パルツィヴァールParzival』とヴィルント・フォン・グラーフエンベルクWirnt von Grafenbergの『ヴィーガロイスWigalois』によって明らかにしたい。